

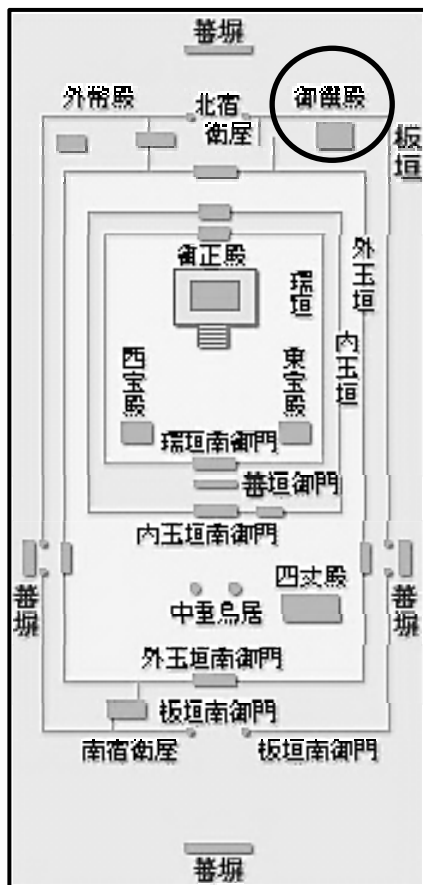
「伊勢神宮両宮参りと遷宮」

担当：3丁目 井守徳弘

●予定コース

近鉄山田線伊勢市駅—伊勢神宮外宮—高倉山古墳(望見)—隱岡遺跡—倭姫命御陵—神宮徴古館—倭姫宮—皇学館神道博物—三重交通バス停徴古館前—(280円・10分)—三重交通バス停伊勢神宮内宮—皇大神宮内宮—おかげ横丁—三重交通バス停内宮前—(410円・17分)—近鉄山田線宇治山田駅 (約6km)

●豊受大神宮(外宮)



外宮と内宮の規模はほとんど同じで、ご正殿を中心にして、瑞垣・内玉垣・外玉垣・板垣の4重の御垣がめぐらされています。

御垣の最も中の聖域を「内院」といい、神聖な一画でご正殿の前方(南側)の東西に併設されているのは、萱葺・神明造の東宝殿・西宝殿。内玉垣と外玉垣の間「中重(なかのえ)」の中間にある中重鳥居の東の萱葺きの建物は、四丈殿といって、奉幣(ほうへい)のとき、幣帛(へいはく)点検の儀が行われます。

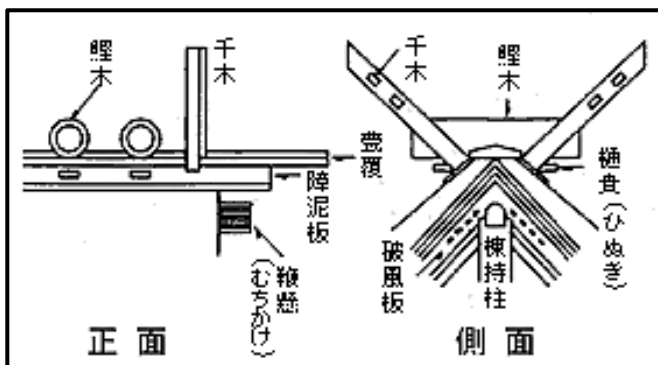
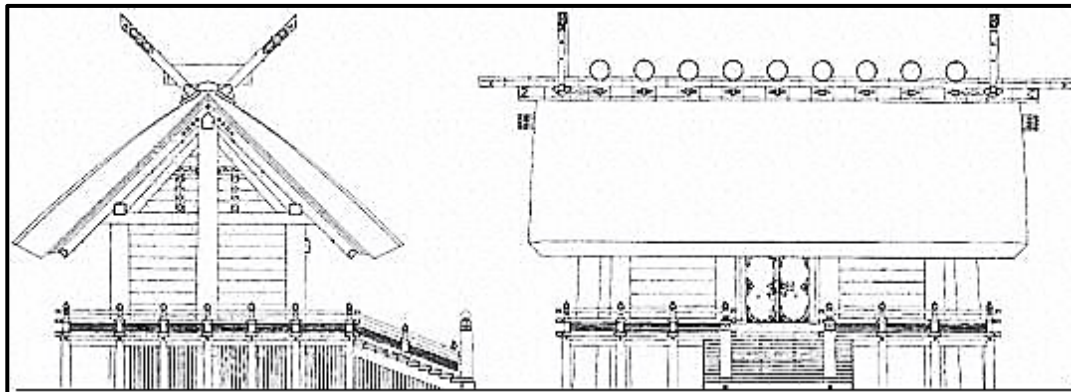
東北隅には内宮にない御饌殿(みけどの又はみけでん)があり、毎日朝夕の二度、天照大御神、豊受大御神をはじめ神々にお食事がたてまつられます。

板垣の南北両御門内には宿衛屋があって、神職が交代で、一日中神様のお近くにおつかえしています

奉幣とは、最も貴重なものとして、幣帛（絹織物）をお供えしていた伝統で、伊勢神宮では今も古代に変わらず、1年に5回の大祭において、天皇陛下より幣帛（へいはく）が奉獻される。奉幣を、天皇陛下の御使いである勅使が参向せられて伊勢の神に捧げられるのが『奉幣の儀』である。



『奉幣の儀』



千木の先は垂直に切られていて、これを外削(そとそぎ)という。
 (内宮は内削)
 鯉木が9本(内宮は10本)

内宮は東西宝殿が正宮の後方にあるのに対し、外宮では前方にあります

御正殿は**唯一神明造**という日本古来の建築様式を伝え、ヒノキの素木（しらき）を用い、切妻、平入りの高床づくりです。屋根は萱葺き、柱は掘立、すべて直線式で、屋根の両端には千木が高くそびえ、棟には鯉木が並びます。

豊受大神宮の主祭神は**豊受大神**として知られている。

『古事記』では豊宇気毘売神と表記される。『日本書紀』には登場しない。

『古事記』**伊弉那岐命と伊弉那美命の条**では

伊弉那美命（いざなみ）の尿（ゆばり）から生まれた稚産霊（わくむすび、衣食を生む神）の子の豊宇気毘売神は、天孫降臨の後、外宮の度相（わたらい）に鎮座したと記されている。神名の「ウケ」は食物のことで、食物・穀物を司る**女神**です。

『古事記』**邇邇芸命の条**で、

天照大御神が天孫降臨の際に邇邇芸命に「八尺（やさか）の勾玉・鏡・草なぎの剣、常世の思金神、手力男神、天石門別（いはとわけ）神をそへたまひて、詔（の）りたまはく、（天照大御神は）『この鏡は、専ら我が御魂（みたま）として、吾が前を拝（いつ）くが如（こと）いつき奉（まつ）れ』（略）この二柱の神は、さくくしろ（五十鈴の枕詞、鈴もくしろ、腕輪のこと）、五十鈴の宮に拝き祭る。次に登由宇気（とゆうけ）神、こは外宮の度相（わたらい）に坐す神なり」とあり、登由宇気神は豊宇気毘売神と同じである。

伊勢神宮外宮の社伝（延暦 23 年（804 年）に編纂された社伝『止由気宮儀式帳』（『群書類従巻第二神祇部二』）では、

雄略天皇 22 年の夢枕に天照大神が現れ、「自分一人では食事が安らかにできないので、丹波国の比沼真奈井（ひぬまのまない）にいる御饌（みけ）の神、等由気大神（とようけのおおかみ）を近くに呼び寄せなさい」と言われたので、丹波国から伊勢国の度会に遷宮させたとされている。元は丹波の神ということになる。

●高倉山古墳（天岩戸古墳）

外宮敷地内の高倉山に高倉山古墳（天岩戸古墳）がある。

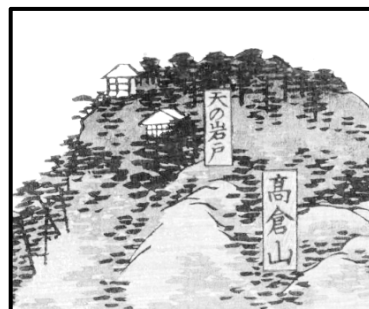
古墳時代後期の円墳で、墳丘の径が 32m、高さが 8m だが、墳丘に見合わない全長 18.5m、高さ 4.1m の両袖型の横穴式石室を持つ。長さ 9.7m、幅 3.3m、高さ 4.1m の玄室をもつ。（参考：石舞台古墳玄室は、長さ約 7.7m、幅約 3.5m、高さ約 4.7m）鎌倉時代には盗掘されていたと考えられ

ている。神宮の敷地内にあり、室町時代末期から江戸時代末期までは天岩戸として参拝の対象となったが、高倉山への入山禁止により見ることができなくなった。当初は7世紀に作られたと考えられていたが、昭和50年（1975）に行われた発掘調査の結果、6世紀中ごろに作られた古墳であると推測されている。この調査で須恵器、土師器、馬具、鉄刀、刀子、玉類などが出土した。



伊勢参宮名所図会

江戸時代中期の寛政9年（1797）年に出版された伊勢参宮のガイドブックである「伊勢参宮名所図会」にも、外宮に高倉山（天の岩戸）の表記があり、神楽殿や茶店などが描かれており、外宮に来た多くの参詣客が高倉山山頂にまで足を伸ばしていたことがわかります。

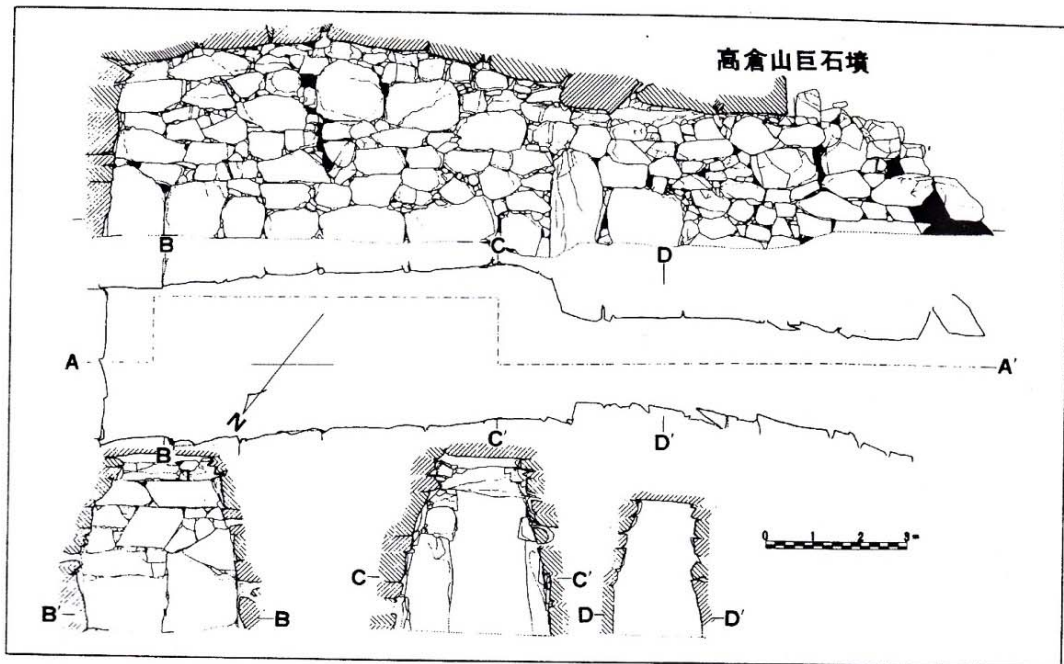


（一部拡大）

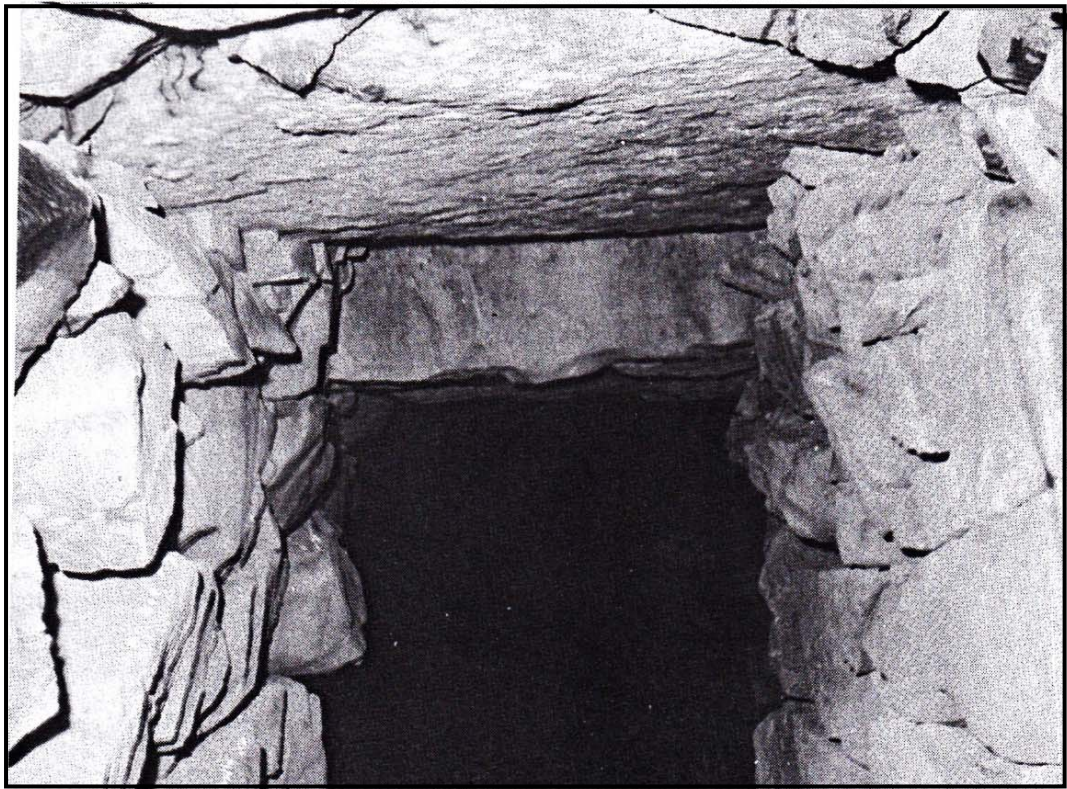
（国立国会図書館データベース資料より）

「外宮御宮地図」寛政3年（1791） 一部
○印内に「岩戸」と記入されている。





(三重大学学芸学部歴史研究会編「ふびと・24」〈1965・9〉より)



高倉山古墳（「広報いせ」より）

●隠岡（かくれがおか）遺跡

隠岡遺跡は昭和58年(1983)に市営住宅建設に伴う事前調査で約2300㎡が発掘されました。

生活の跡や、生活の道具から弥生時代の村の跡と平安時代の建築郡跡が同地に同時に見つかった遺跡です。かなり広い範囲の遺跡がありましたが、今では小さな公園に再現された竪穴式住居1棟、掘立柱建物跡2残すのみとなっています。

弥生時代の村の跡は**弥生時代後期の竪穴式住居22棟**、主幹排水路が宮川右岸の神宮周辺地で初検出された貴重な遺構です。

遺物には壺、瓶、高杯などの土器や斧などの石器が出土されました。このことから眼下に勢田川の沖積地を見下ろす台地に「弥生のムラ」が形成されていたことがわかりました。

●倭姫命御陵（宮内庁陵墓参考地）

この辺りには外宮神官度曾四門の氏寺常明寺がありましたが、明治の廃仏の波に乗り廃寺となりました。

当時の常明寺は、神都随一の大伽藍を擁していたらしく、伊勢参宮名所図絵にも描かれています。常明寺門前町は遊郭のある、五十鈴川駅近くの古市遊郭街の入り口であり、古市の遊郭とは違う遊郭が存在していた。

常明寺門前町は明治元年11月倭町と改称され、常明寺自体が、明治2年2月廃絶となり、同時期に常明寺門前町の遊郭街の姿も消えた。（常明寺は現在、伊勢市駅北側の伊勢市一之木町で明治23年(1890)再興されている）

この御陵は、一名「尾上御陵」ともいわれ『倭姫命世記』（神道五部書の一、神護景雲2年(768)ともいわれるが、鎌倉時代の建治・弘安(1275～1288)のころ、伊勢外宮の神官の渡会行忠の撰になったもの）によると、神都(伊勢)において薨去せられ尾上峰に隠し奉ると云われています。

しかし、尾上御陵は倭姫宮創建後の昭和3年(1928)に倭姫命御陵墓参考地に指定され、宮内庁に管理されている。

●倭姫宮

倭姫命は、第 11 代垂仁天皇の皇女です。第 10 代崇神(すじん)天皇の皇女豊鍬入姫命(とよすきいりひめのみこと)の後を継いで「御杖代(みつえしろ)」として皇大御神(すめおおみかみ)に奉仕され、皇大御神を戴いて大和国をお発ちになり、伊賀・近江・美濃等の諸国を経て伊勢の国に入られて、ご神慮によって現在の地に万代不易の皇大神宮をご創建されました。

「御杖代」とは皇大御神の御杖となって、ご神慮を体して仕えられるお方の意です。倭姫命から後、代々の天皇は未婚の皇女を伊勢に遣わして皇大御神に奉仕させられましたが、これらの方を斎王(いつきのみこ)と申し上げます。倭姫命は皇大神宮ご鎮座ののち、神嘗祭(かんなべさい)をはじめとする年中の祭りを定め、神田並びに各種ご料品を奉る神領を選定し、禰宜(ねぎ)、大物忌(おおものいみ)以下の奉仕者の職掌を定め、斎戒(さいかい)や祓(はらえ)の法を示し、神宮所属の宮社を定められるなど、神宮の祭祀と経営の規模を確立されました。

このように大きなご功績をお遺しになられた命の御徳をお慕いして、大正の初年から神宮司庁と宇治山田市(現在の伊勢市)が命をまつるお宮の創立を請願してきましたが、大正 10 年 1 月 4 日、皇大神宮別宮として当宮のご創立が許可され、同 12 年 11 月 5 日にご鎮座祭が執り行われました。当宮は上のようなご事情により創立が極めて新しいのです。

●神宮徴古館 (入館料 : 大人 300 円、大学生 150 円)

神宮徴古館では神宮式年遷宮で「撤下(おさがり)」された御装束神宝のほか、内宮正宮の 1/20 サイズの模型、遷宮で解体された本殿に使われていた扉、千木・鯉木、祭典用具などを中心として展示されている。そのほか、土器、鏡、太刀などの古墳時代の出土品、古文書、国史絵画、俳祖荒木田守武(戦国時代の伊勢神宮祠官・連歌師)に関する資料、平賀亀祐(昭和初期の洋画家)の作品など国の重要文化財 11 点を含む約 8,000 点の資料を所蔵している。

片山東熊(旧赤坂離宮設計者)による設計により、明治 42 年(1909)完成し、明治 44 年に周辺の土地を含め伊勢神宮へ献納されました。昭和 20 年(1945)7 月にアメリカ軍の空襲により炎上したが、昭和 28 年(1953)第 59 回神宮式年遷宮を記念し、徴古館は修復された。

●式年遷宮と御装束神宝

伊勢神宮には 20 年に一度の式年遷宮があります。遷宮とは、新しい神殿を造り、そこに大御神さまのお遷りを願うことですが、この 1300 年の伝統の祭りには 1500 余点に及ぶ御装束・神宝も古式のままに調進されます。

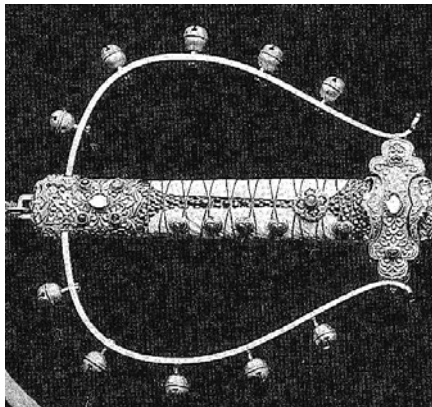
御装束とは「飾りたてること」で、衣服や服飾品などを含めた広い意味をもち、神座や殿舎の舗設品（調度を立て室内を飾る）、服飾品、遷御の儀に用いる品々を総称します。

神宝とは、神々のご用に供する調度品で、紡績具、武器・武具、馬具、楽器、文具、日用品に大別できます。これらは平安時代の『儀式帳』の規定により、上代の文化と技術を現代に伝え、当代最高の美術工芸家によって調整されます

この神々の御料は 20 年間、御正殿にお納めし、次回の御遷宮で撤下します。ただし両正宮の神宝に限っては新宮の西宝殿に移され、更に 20 年間保存されたのちに、撤下します。製作上の参考資料のためです。

明治以前までは撤下した神宝類の燃えるものは燃やし他は土中に埋めました。神のお使いなされた御料だから人の手に渡るのは恐れ多いとの考えからです。現在では、すべて保存され、神宮徴古館で一部を常時展示しています。

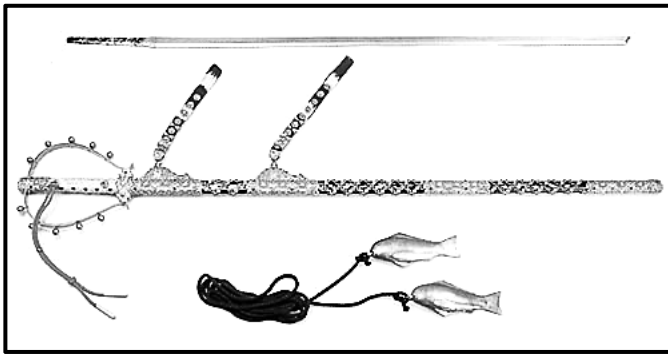
琥珀、瑪瑙、瑠璃、水晶などをはめ込んで、きらびやかに輝く玉纏（たままき）御太刀。奈良時代の様式を伝える御馬の木彫。白銅の御鏡、御櫛、神々の衣類など、いずれも当代の最高の技術によって伝統の美が生かされた絶品ばかりです。正倉院の宝物のような 714 種、1500 点余が 20 年ごとに確実に調整され次代へ継承されることにより、日本の技法が脈々と今日まで伝わってきたのです。



須賀利御太刀の柄

伝統の技術といっても、須賀利御太刀（左、柄の部分）には朱鷺の尾羽二枚が必要ですが国際保護鳥となり使用できなくなっています。こうした原材料や錦綾の布帛の染料も天然素材がなくなってきました。いつまでできるか危惧されています。

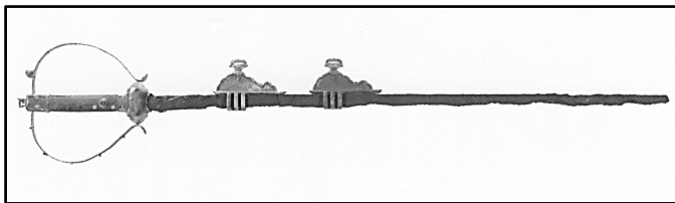
今年の第 62 回式年遷宮には石川県いしかわ動物園で飼育する 8 羽から抜け落ちた 6 枚の尾羽を譲ってもらった。



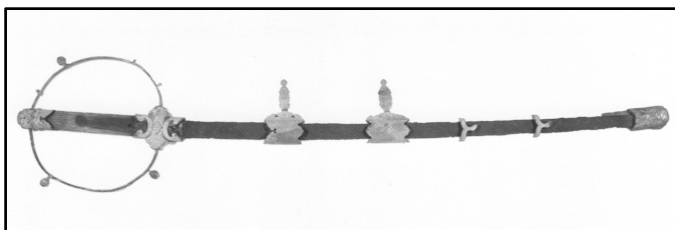
玉纏（たままき）御太刀

昭和の現代

全く同じではなく、
微妙に時代ごとに
異なる。



鎌倉時代



室町時代

●式年遷宮

神宮の式年遷宮の起源、それは天武天皇の御世に定められたこと、『太神宮諸雑事記』（『群書類従』巻第二神祇部二）に天武天皇の朱雀3年の条に、「二所大神宮御遷宮の事、20年に一度まさに遷御せしめ奉るべし、立てて長き例となせ云々」とあり、そのあと天武天皇の皇后でいらっしやいました廣野姫尊が即位されての持統天皇の4年に皇大神宮、6年に豊受大神宮の第一回の遷宮が行われたとあり、神宮ではこの天武天皇が遷宮の制を定められたこと、また持統天皇の御世にそれぞれ行われたこと、正しい伝承として長く疑わず継承されてきました。

しかし、第40回後花園天皇の寛政3年（1462）は皇大神宮の前遷宮より32年かかっており、第36回後亀山天皇の天授6年（1380）は豊受大神宮の前遷宮より36年かかっている。

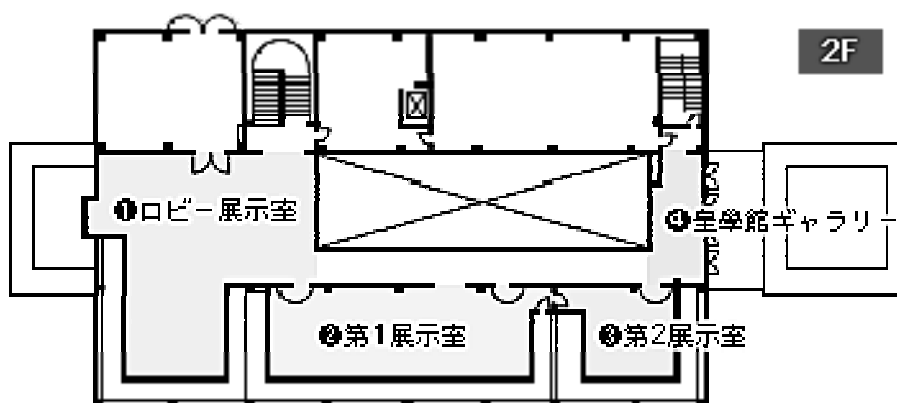
第41回正親町（おおぎまち）天皇の天正13年（1585）は皇大神宮の前遷宮より124年かかっている。第40回正親町（おおぎまち）天皇の永禄

6年（1563）は豊受大神宮の前遷宮より130年かかっている。
これには、戦乱で時代が大きく変わるとか、大飢饉であるとか政治不安があると延びたこともあるようです。

第62回式年遷宮は平成25年10月2日皇大神宮、10月5日豊受大神宮の遷御が行われた。

●皇学館大学神道博物館

皇学館大学神道博物館は、我が国の神道及び神社の紹介を通じ、日本の文化及び歴史・伝統・信仰・思想等の様子を正しく伝える目的のもと、皇学館大学が平成元年に設置、同4年10月26日開館した大学付属の博物館施設です。



神道博物館のロビー展示室においては、種々の特殊神饌を展示している。「神饌」とは、神の召し上がる食物の総称で、大御饌（おおみけ）・御饌（みけ）・御食（みけ）・御膳（ごぜん）・神膳（しんぜん）・御物（おももの）・御贄（みにえ）などとも言う。

今日、多くの神社でふつうにお供えされる神饌は、和稻（にごしね、粳を除いた米）・荒稻（あらしね、粳付の米）・酒・餅・海魚・川魚・海菜・野菜・菓・塩・水で、それを、生の丸のままの形で、一品ごとに三方に盛って神前に供えている。このような神饌を「丸物神饌（まるものしんせん）」あるいは「生饌（せいせん）」などと称する。

それに対して、明治以前においては、包丁を加え調理した神饌が主流をなしていた。これを「熟饌」あるいは「特殊神饌」・「古式神饌」などと称する。

「特殊神饌」とは現在、熟饌が供えられる代表的な祭としては、宮中においておこなわれる大嘗祭（だいじょうさい）・新嘗祭（にいなめさい）や、

伊勢神宮においておこなわれる日別朝夕大御饌祭（ひごとあさゆうおおみけさい）・月次祭（つきなみさい）・神嘗祭（かんなめさい）などがある。このほか、賀茂御祖神社（かもみおやじんじゃ）と賀茂別雷神社（かもわけいかずちじんじゃ）の賀茂祭（葵祭 5月15日）、春日大社の春日祭（3月13日）、大神神社（おおみわじんじゃ）撰社率川神社（いさかわじんじゃ）の三枝祭（さいくささい）などがある。

神道博物館に展示しているのは、この賀茂・春日・率川神社などの特殊神饌である。

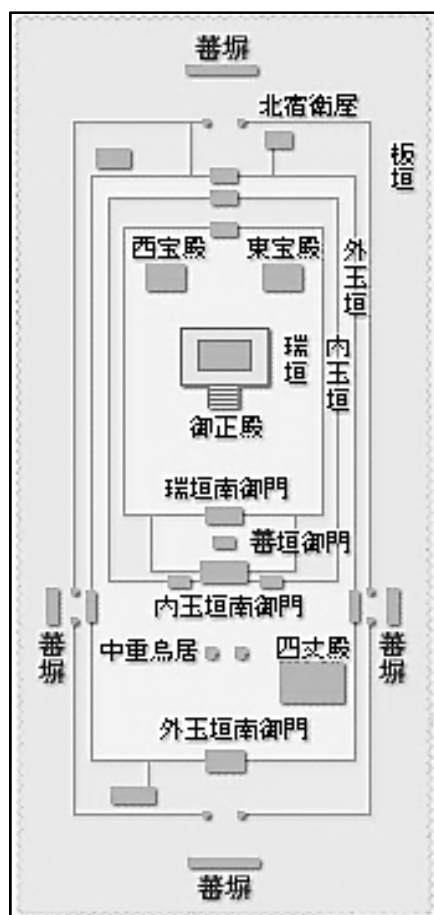
第一展示室

主として神社における祭祀（まつり）に用いられる祭具を展示している。

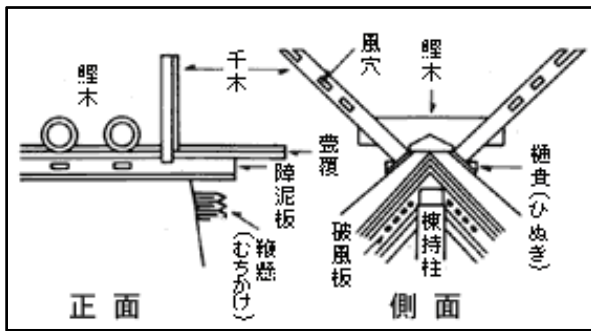
第二展示室

郷土関係資料の伊勢歌舞伎資料（千束屋資料）と皇學館大学元理事長故濱地文平氏が蒐集保管していた、三重県内出土のものを中心とする97点の考古資料を展示しています。

●皇大神宮（内宮）



御垣内は 6,807 m²の広さがあり、御垣の配置や構造は、外宮とほぼ同じです。ご正殿を中心にして、瑞垣・内玉垣・外玉垣・板垣の4重の御垣がめぐらされています。御垣の最も奥の聖域を「内院」といい、神聖な一画でご正殿の後方(北側)の東西に併設されているのは、萱葺・神明造の東宝殿・西宝殿。内宮と外宮の規模はほとんど同じですが、内宮の中重鳥居の柱の左右には八重櫛(やえさかき)が飾られています。板垣の南北両御門内には宿衛屋があって、神職が交代で一日中神様のお近くにおつかえしています。



ご正殿のお屋根は萱葺で、両妻は直径 79cm の太い棟持柱(むなもちばしら)が支えています。その棟には鯉木が 10 本 (外宮は 9 本) 並び、その東西両端、破風板の先端が屋根を貫いて、千木

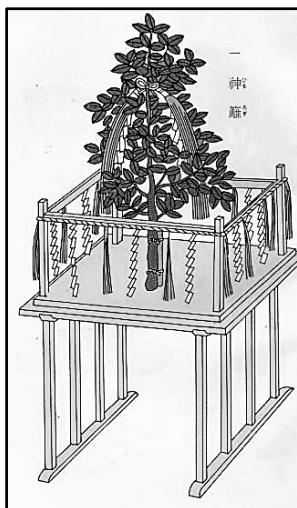
(ちぎ)になっています。内宮では、千木の先は水平に切れ千木の先は水平に切られていて、これを内削(うちそぎ、外宮は 外削)といいます。

東宝殿・西宝殿が御正殿の奥にある。(外宮は御正殿の前)

●皇大御神の御神体

国の内に隈なく光が照り徹ると称えられる皇大御神の御神体は、八咫鏡(やたのかがみ)で、八坂瓊勾玉(やさかにのまがたま)と草薙剣(くさなぎのつるぎ)を加えて三種の神器(じんぎ)と呼ばれます。

この御鏡を代々宮中で天皇ご自身がお祭りされていましたが、崇神(すじん)天皇 6 年の御代に皇居の外の大和の笠縫邑(かさぬいのむら)に神籬(ひもろぎ)を立ててお祀りすることになりました。神籬とは榊のような常緑樹で囲われた神聖なお祀りの場を意味します。



そこでは、天皇にお代わりして、豊鍬入姫(とよすきいりひめ)命が皇大御神をお祭りされていましたが、垂仁天皇の 25 年 3 月 10 日の御代に至って、天照大神を豊鍬入姫命からはなして、倭姫命と交替し、新たに皇大御神をお祭り申し上げるにふさわしい地を求められた。

宇陀の篠幡（ささはた）に行き、引返して近江国に入り、美濃をめぐって伊勢国に至った。そのとき天照大神は、倭姫命に教えていわれるのに、「伊勢国はしきりに浪の打ち寄せる、傍国（かたくに、中心ではないが）の美しい国である。この国に居りたいと思う」。そこでことばのままに、その祠を伊勢国に立てられた。そして齋宮（いつきのみや）を五十鈴川のほとりに立てた。

●天照大御神（卑弥呼）と豊受大神（台与）の私説

豊鍬入姫命は奈良県桜井市にあるホケノ山古墳を豊鍬入姫命の陵墓とする伝承があり、また、元伊勢の伝承地の1つでもある、桜井市の檜原神社の三ツ鳥居の横に、**豊鍬入姫宮**が祀られている。

名前に「豊（とよ）」が付くことから、邪馬台国（纏向遺跡）の卑弥呼の後の**台与（とよ）**に比定する説があり、私もそう思う一人です。

豊受大神宮（伊勢神宮外宮）の『古事記』でいう**豊宇気毘売神**が台与という説もあるが。豊宇気毘売神は『止由気宮儀式帳』でいうとおり、丹波国の出身であり台与ではない。

崇神天皇6年に笠縫邑に神籬（ひもろぎ）を立てて祀ったとあり、この時、**邪馬台国卑弥呼が崩御**したのではないかと考えます。それを豊鍬入姫命（台与）が祀った。

笠縫邑はいろいろと比定する説もあるようですが、ここは三輪山の山麓の檜原神社付近と思われます。勿論、卑弥呼の墓は**箸墓**です。

出雲国が「ヤマト国」（吉備国を入れた連合国）に敗れ、主祭神である大国主神をヤマト国の中心地である女王の都である纏向の三輪山に祀った。この邪馬台国で、卑弥呼は鬼道で衆を惑わしていた。

「卑弥呼は既に年長大であったが夫を持たず、弟がいて彼女を助けていた。王となってからは、彼女を見た者は少なく、ただ一人の男子だけが飲食を給仕するとともに、彼女のもとに出入りをしていった。宮室は楼観や城柵を厳しく設けていた」と『魏志倭人伝』倭人の条にもある。

卑弥呼は倭（やまと）**迹迹日（ととひ）百襲（もそ）媛（ひめ）命**と同じです。

『日本書紀』で倭迹迹日百襲媛命の墓として築造したと伝えられる箸墓古墳は、邪馬台国の都である纏向遺跡の中にある。

そして、卑弥呼の跡を台与が13歳で継いだ。邪馬台国は治まった。しかし、邪馬台国連合は崩れ、崇神天皇のクーデターにより邪馬台国は乗っ取られた。

崇神天皇は邪馬台国が主祭神としてあがめた天照大御神と台与を伊勢

国に祀った。これは戦勝国側が降伏を迫り、人身殺戮がなく代替の主祭神を与えた。これが出雲国では出雲大社であり雲太、和二、京三に例えられる巨大な建築物を創出した。そして、三輪大社では出雲神である大国主神（大物主神）を大田田根子により祀らせた。これは『日本書紀』によると崇神7年のことである。これより一年前の崇神天皇6年に豊鋤入姫命に託し祀らせている。ほぼ同時期と考えてよいであろう。この頃に疫病が流行り百姓の流離や反逆がおこり、世の中が騒然としていた。

クーデターを起こした崇神天皇はさらに強力に神の勢いを借るようにしたのであろう。これが纏向では大坂山（二上山）の石を運んで昼は人が造り、夜は神が造ったと伝えられ（大阪柏原市芝山の石が見つまっている）、山から墓に至まで、人々は連なって手渡しで石を運んだという巨大な古墳を誕生させた。

崇神天皇が御肇國（はつくにしらす）天皇（『日本書紀』）といわれるのは、大和国の始まりであるからである。この天皇以降わが国の天皇の系譜として続くのである。

時代は下り、持統天皇6年に伊勢神宮行幸にあたり、三輪朝臣高市（たけち）麻呂より諫められたが天皇は諫めに従わず伊勢行幸を実施された。それ以降明治まで約千年間天皇の伊勢御親拝は行われなかった。これは、敗戦国の主祭神をお祀りしてあり、天皇が拝むことは許されなかったためである。明治になってから明治天皇が明治2年に御参拝された。明治14年（1881）の神道事務局祭神論争における明治天皇の裁決によって伊勢派が勝利の後、天照大神が最高の神格を得たが明治維新後、敗戦国の邪馬台国の主祭神が分からなくなってしまったのである。

(追加資料)

伊勢神宮

『日本書紀』に天照大神は瓊瓊杵(ににぎ)尊に八坂瓊(やさかに)の曲玉・八咫(やた)鏡・草薙劍の三種の神器を授けた。天照大神は「此の宝鏡を見るときは、私と思え」として、天照大神は自身の神霊を込めたとされる。

『古事記』もや八咫(やさか)の勾璽(まがたま)・鏡・草薙劍で、鏡は「我が御魂として、拝(いつ)くが如(ごと)いつき奉れ」と記している。

この鏡は神武天皇に伝えられ、以後、代々の天皇の側に置かれた。

現在では八咫鏡は伊勢の神宮の皇大神宮(内宮)に、八咫鏡の形代(レプリカ)は宮中三殿の賢所に、草薙劍は熱田神宮に、それぞれ神体として奉斎され、草薙劍の形代は八咫瓊勾玉とともに皇居吹上御所の「剣璽(けんじ)間」に安置されている。

第10代崇神天皇6年に「天照大神・倭大国魂の二神を、御殿にお祀りした。ところが神の勢いを畏れ、共に住むのに不安があり、天照大神を豊鍬入姫命に託し、大和の笠縫邑に祀った」とある。倭大国魂は大田田根子(男)によって祀られた。

垂仁天皇25年3月の条に、「天照大神を豊耜入姫命(豊鍬入姫命)より離して、倭姫命に託された。倭姫命は大神を鎮座していただくところを探して、菟田(うだ)の篠幡(ささはた)に祀り、更に還りて近江国に入りて、東の美濃を廻りて、伊勢国に至る」とあり、倭姫命が天照大御神の神魂(八咫鏡)を鎮座させる地を求め旅をしたと記されているのが、内宮起源説話である。

『古事記』には垂仁天皇記に倭比売命が伊勢大神の宮を祀ったとのみ記されている。

豊受大神宮(外宮)は平安初期の『止由気神宮儀式帳』によれば、雄略天皇22年7月に丹波国の比沼真奈井原(まないはら)から、伊勢山田原へ遷座したことが起源と伝える。

(古代)

皇室の氏神として、天皇以外の奉幣は禁止された。これを「私幣禁断」という。私幣禁断とは、天皇だけが参拝できることだが、実際は参拝せず、それは斎宮(王)と勅使の仕事となる。

天武天皇の時代に斎宮が制度化され、『扶桑略記』によれば天武天皇の皇女である大伯皇女が初代とされる。

(中世)

日本全体の鎮守として全国の武士から崇敬された。神仏習合の教説において神道側の最高神とされ、外宮の神職、度会(わたらい)家行より伊勢神道(度会神道)が唱えられた。

戦乱により神宮領が侵略され、経済的基盤を失ったため、式年遷宮が行えない時代(特に織豊政権時代)もあった。

(近世)

お蔭参り(お伊勢参り)が流行し、多くの民衆が全国から参拝した。

(近代)

明治天皇が在位中の天皇としては初めて参拝した。第二次世界大戦以後は、宗教法人神社本庁発足、全国神社の本宗とされた。

●式年遷宮

神宮式年遷宮は、原則として20年ごとに、内外両宮の正宮の正殿を始めとする神座を遷し、宝殿、外幣殿、鳥居、御垣、御饌殿など計65棟の殿舎といった全社殿を造替する他、装束・神宝、宇治橋等も、14の別宮の全ての社殿を造り替えて神座を遷す。

神宮式年遷宮は、飛鳥時代の第40代天武天皇が定め、持統天皇4年(690)に第1回が行われた。

戦国時代の120年以上に及ぶ中断や幾度かの延期などはあったものの、およそ1300年にわたって行われている。

式年遷宮の際に解体される旧殿に使用された用材は、神宮内やその摂社・末社をはじめ、全国の神社の造営等に再利用される。例えば、内宮正殿の棟持柱については宇治橋神宮側鳥居となり、さらに関の東の追分の鳥居となる習わしである。また、外宮正殿の棟持柱は宇治橋おはらい町側鳥居となり、さらに桑名の七里の渡しの鳥居となる習わしである。

第62回式年遷宮では約570億円の予定で作業が進められています。戦後は制度の変革により政府の手を離れましたので、国民の浄財によってご奉賛することになりました。

◆神宮宮社の一覧表

所管区分	正宮	別宮	摂社	末社	所管社	別宮所管社	総計
皇大神宮	1	10	27	16	30	8	92
豊受大神宮	1	4	16	8	4		33
計	2	14	43	24	34	8	125

正宮	皇大神宮(内宮) 豊受大神宮(外宮)	三重県伊勢市宇治館町 三重県伊勢市豊川町
別宮	内宮	荒祭宮 月讀宮 月讀荒御魂宮 伊佐奈岐宮 伊佐奈弥宮 瀧原宮 瀧原竝宮 伊雑宮 風日祈宮 倭姫宮 (内宮境内)
	外宮	多賀宮 土宮 月夜見宮 風宮 (外宮境内)
		三重県伊勢市中村町 (月讀宮境内) (月讀宮境内) (月讀宮境内) 三重県度会郡大紀町滝原 (瀧原宮境内) 三重県志摩市磯部町上之郷 (内宮境内) 三重県伊勢市楠部町 三重県伊勢市宮後 (外宮境内)